

個人化論の再検討

酒巻 秀明*

ウルリッヒ・ベックとエリーザベット・ベック＝ゲルンスハイムの個人化論は社会の中で個人化が進んでいるという認識以上の広がりを持っている。そこでのこの論稿ではまず彼らの個人化の概念を検討し、次に実証的な研究や他の社会学理論と比較することで個人化論の持つ特徴について考察し、その可能性について検討を加えていく。

ベックとベック＝ゲルンスハイムのいう個人化は人々が以前の時代にあった社会的な制約から解き放たれ、自分自身で選択する自由を手にするが、その選択には新しい制約がついているというものであった。その際、ベックとベック＝ゲルンスハイムは個人化論で新しい時代の状況を個人の立場から見ようとしていた。そして、彼らは社会の立場から個人を見るのではなく、個人の立場から社会を再構想する必要性を強調しながら、そのためには今まで使い古してきた概念の前提や妥当性などがもう一度再検討されなければならないとも主張している。新しく手に入れた自由は個人が負うべきリスクも含んでいるが新しい可能性も含んでいるからである。

Key Words :個人化, ウルリッヒ・ベック, エリーザベット・ベック＝ゲルンスハイム

はじめに

2010年の国勢調査の速報によると、単身世帯の数が増え続けているという。理由として考えられることは、若い世代で一人暮らしをしている人が増えていること、他方高齢者の中でも一人で暮らしている人が増えていることである。若い世代の一人暮らしというのは未婚化という現象と大きく関係している。他方高齢者も以前とは違って子どもとの同居を望まない人が増えている。同居をして遠慮をするよりも好きなように暮らせる方がいいということらしい。

* 人間学部

単身世帯が増えているということは家族のあり方も変わっていることを意味している。少し前なら親と子からなる核家族が最も一般的な家族形態と言えたかもしれないが、今では結婚しない人、子どものいない夫婦、ひとり親など核家族に変わる生活形態をとる人が増えてきている。また、核家族の形態をとっている家族の中にも事実婚のように「ノーマル」な形の家族関係を選択しない人もいる。

これと似たようなことは労働関係にも見ることができる。今、会社で働く人が昔の意味でのサラリーマンとは限らない。同じ職場で働く人の中に、会社に所属していない人が多くいる。いわゆる非正規社員が増えているのである。その結果、フリーターという初めからサラリーマンとは違う人生を歩む人がいる。フリーターは好きな時、好きなだけ働けばいいからいいというのである。

こうして見ると、家族でも仕事でも個人によって違うという傾向が強まっていて、我々の社会は個人中心の社会になりつつあるというように見える。だが、別の事情も見えて来る。例えば、非正規社員の数は景気が悪くなると減るのである。会社は不景気になると非正規社員から減らして行く。すると非正規社員の増加は会社の都合の結果ということにもなる。家族についても同じことが言えるだろう。結婚したくても収入が足りないので結婚できない人もいる。

すると、家族形態や労働形態の多様化は個人だけの問題ではなく、社会のあり方自体の問題にもなって来る。この社会と個人の関係から出て来る個人化を一つの理論的な枠組みにまとめた社会学者にウルリッヒ・ベックとエリーザベット・ベック＝ゲルンスハイムがいる。二人は個別に、また時には共同して、個人化の問題を取り上げている。

そこで本稿では、彼らの個人化論の再検討を課題とすることにしたい。以下では、まずベックとベック＝ゲルンスハイムの提示する個人化論の内容を検討し、次に他の研究との比較の中から彼らの理論の特徴を明らかにして行くことにする。

1 個人化の概念

それではまず、個人化の概念の検討から始めることにしよう。

ベックとベック＝ゲルンスハイムは個人化の概念について様々な形で説明をしているが¹⁾、簡潔な形では次のように説明している。個人化は、「議論や現実において交差し重なり合う二つの意味を通じて特徴づけられる、社会的な発展や経験のアンサンブルを意味している」。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 11)第一に個人化は、階級、身分、男女の役割、家族、近隣などの既にあった社会的な生活形態の解体を意味するが、第二に現代社会の中で個人に、新しい制度的な要求、コントロール、強制が現れてくることを意味している。すなわち「個人は労働市場、福祉国家、官僚制を通じて、規則、基準、請求の条件の網の中に絡めとられている」(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 12)のである。従って、ここで言う個人化とは個人の解放と新たな制度的な強制という二重の側面を持った現象のことである。

しかし、一般的な意味での個人化は現代に特有の現象ではない。よくある質問は、個人化はずっと昔から、例えば古代ギリシャ、中世の宮廷文化、ルネサンスの時代にもあったのではないかというものである。ベック／ベック＝ゲルンスハイムも、この言葉の意味においては新しいものではないと言っている。(Beck/Beck-Gernsheim 1990: 16) しかし、ベック／ベック＝ゲルンスハイムが強調するのは、その大衆的な性格であり、今日の個人化の推進力の範囲や体系性である。この新たな特徴は、豊かな西洋の産業社会において長期にわたって続いた近代化のプロセスの副次的な結果として生じたものである。これまで何世紀もの間、個人の発展の願いを実現できたのは限られた集団、エリート的少数派の人であった。それに対し、ここで言う個人化のプロセスの持つ「リスクの多いチャンス」は社会の発展により非常に広い範囲の人に享受できるものになり、「自分の人生を送るといふ、以前は少数の人のみに要求されていたことがより多くの人間に、特別な場合には、すべての人に要求される」(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 21)のである。ベック／ベック＝ゲルンスハイムによると、個人化のプロセスはまず、男性の個人化として始まり、次に20世紀の後半以降女性の個人化が続くことで社会全体の個人化が進んで行く。

では、個人化の原動力は何なのか。18世紀、19世紀の言わばエリート的な市民的な個人化は本質的に資本の所有を基本とし、その社会的、政治的アイデンティティを封建的な支配や法秩序に対する闘争の中で発展させていった。それに対しベックは現代に見られる個人化を労働市場型個人化とよんで、労働市場が果たした役割を強調している。この労働市場型個人化は三つの労働市場に関係した構成要素を持っているが、この三つの要素とは、教育、移動性、競争である。(Beck 1994: 47)

教育の果たした役割については次のようなことが考えられている。まず、教育の拡大によって伝統的な考え方ではなく、普遍的な考え方が広められて行く。また、教育は入学や卒業の試験などを通じ、個人的な教育への権利や労働市場でのキャリアを可能にしていった。

次に、移動性である。ベックによれば労働市場への参加は移動性と結びついている。労働市場はそれによって始まった移動性を通じ(転職、転居、転社、転勤、上下の階層移動)それぞれのライフコースに個人化をもたらして行く。

また、競争では人は自分の特別なところを示さなければいけない。競争の圧力が強まると、同じような人たちの中に他者との違いが強調され個人化が持ち込まれる。

ただし、教育、移動性、競争の三つは互いに独立している訳ではなく、補完し、重なり合う。それらの共同作業によって個人化の推進力が動き出したのである。

この意味での個人化が進むと現実にはどのような変化が生じてくるのだろうか。

ベック／ベック＝ゲルンスハイムによると、個人化のプロセスの決定的な特徴は、個人のアクティブな独自の努力が認められているだけでなく、要求されることである。拡大された選択の余地と決断の強制の中で個人の処理すべき行為の必要性は増大し、人と折り合い、調整し、統合する能力が必要となる。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 15) これは個人にとっては楽なこと

ではない。以前なら、ライフコースはパターン化していたし、男女の役割分担、慣習、階級文化など困った場合には参照できる範型があった。しかし、個人化の進展の中で、多くのことが個人にまかされるようになる。だからといって、人々は先のことが読めている訳ではない。ここでは決断がされなければならない。原則的に決断を排除した人生の可能性の部分は小さくなり、決断にまかされた、自分で作るべきバイオグラフィーの部分は増加する。「ノーマルなバイオグラフィーは、選択的なバイオグラフィーへと変化する」(Beck/Beck-Gernsheim 1990: 13)のである²⁾。

だが、ここから別の問題が生じる。個人にとって、自分に起こる出来事は少なくとも自分自身によって行なわれた決断の帰結となる。かつて個人に起こるのは、神や自然によって送られた「運命の衝撃」であり、自分自身で責任をとらなくていい出来事であったが、今では、試験の不合格、失業、離婚などは「個人の失敗」と見なされる。個人化された社会では「量的に見てリスクが増大するだけでなく、質的に新しい形の個人的リスクが生じている」のである。(Beck 1986: 218) 例えば、専業主婦になることは一つの決断である。今では専業主婦といっても将来に不安がない訳ではないし、子どもが生まれても、以前のように近所の助けを当てにはできない。リスクを負いながらの決断なのである。

しかし、だからといって個人は全く自由であって、好き勝手にできるという訳でもない。個人のプライベートな暮らしは、明らかに個人の手を完全に離れた関係や条件に依存するようになる。自由となったはずの個人は、労働市場依存的となり、それゆえ教育依存的となり、社会的な規則や扶助に、交通計画に、幼稚園の空きや時間に、奨学金に、年金のモデルに依存するようになる³⁾。(Beck/Beck-Bernsheim 1990: 15)

更に、ベックによると、以前の身分的に特徴づけられた、階級文化的、家族的ライフコースのリズムは、制度化されたライフコースの範型と重ね合わされ、置き換えられてしまう。(Beck 1986: 211) 教育システムへの参加と終了、賃労働への参加と終了、年金支給年齢の社会的な確定と言うようなものだけでなく、児童、少年、成人、定年退職、高齢者といった、ライフコースの時期区分や日々の時間のリズム、時間のやり繰りなどまで標準化されてしまう。

ライフコースの制度的な特徴が意味するのは、教育制度、職業システム、社会的保障のシステムの規則が、人間のライフコースの区分とかみ合っていることである。だから、制度を確定したり、制度に干渉することは、人間のライフコースの中で確定と干渉を実行することである。保育園の保育時間の変更は女性に、母親と職業の義務の一致を難しくするし⁴⁾、年金年齢の引き上げは一つの通達で一つの世代の社会的年齢を若くしてしまうことである。この歳ならまだ働けるといふことにしてしまう。

また、このような制度は現実とは対応しなくなることもある⁵⁾。制度が土台とするのはしばしば前の時代の現実だからである。法的に固定化された「ノーマルなバイオグラフィー」は正規雇用や両親と子という家庭を中心に作られているため、非正規雇用者のように当てはまらない人は不利をこうむることも多くなる。制度と個人は緊張関係に立っているのである。

しかし、人々の決断があくまで制度的な基盤の上でなされるとしても、ベックとベック＝ゲルンスハイムが個人化を悲観的に見ているだけではないことも強調しておこう。「リスクのある自由」(Beck/Beck-Bernsheim 1994)という本の題名の通り、個人化の中で人々はより多くの自由も手にしているのである。

以上が個人化論の概要である。しかし、ベックとベック＝ゲルンスハイムの個人化論の持つ意味をもっと深く理解するにはより詳細な検討が必要になる。そこで次節以降では、対立あるいは類似する議論との比較の中で個人化論の特徴を検討して行くことにしよう。

2 個人化論の実証的な批判

ベック／ベック＝ゲルンスハイムの個人化論に対しては様々な批判があるが、興味を感じさせるものの一つは実証的な批判である。この立場からはギュンター・ブルカルトのものが挙げられるだろう。(Burkart 1993a)

1) ブルカルトの批判

ブルカルトは、ベックの理論的モデルの範囲と限界を見極めるためとして、ドイツ中心のベックに対し、アメリカの例を使って個人化論の問題点を指摘している。ここでアメリカを取り上げる理由についてブルカルトは、個人化論が西洋の先進的な産業社会の中での発展を説明しようとしていることを挙げている。(Burkart 1993a: 160) 確かに、アメリカは個人主義的な伝統があり、ドイツで個人化との関係で考えられているような家族の領域での一連の変化も生じている。しかし、アメリカは社会構造的に、特に経済や人種の点でドイツほど均一ではないので個人化が先進国の一般的な傾向ではないという反証を示す可能性があるからである。

ブルカルトが検証の中でまず指摘している問題は、個人化論は焦点の定まっていない、多義的な概念であって、異なった現象についての議論で使用されている。その為きちんとした統計的な検証が難しくなっている、ということである。(Burkart 1993a: 171)

さて、ブルカルトによると、こうした個人化の概念の検証のためアメリカとドイツを比較するには、文化的な違いや違う傾向に注意する必要があるという。従って、ブルカルトは個人化論の証拠と見られるようなケースも多くはあるが、すぐには肯定できないと考えている。確かに、結婚しないカップル、若いシングルマザーなどは以前から黒人に多く見られたし、結婚年齢や独身の人の割合の上昇のような現象も黒人の間で増加している傾向ではある。しかし、ここではアメリカ独自の社会的条件を考慮に入れる必要があるという。すなわち、黒人の差別や貧困である。それ故、ベック／ベック＝ゲルンスハイムの言う意味での個人化は普遍的な傾向ではなく、高等教育を受けた人など特権的な社会的集団に限られたものであるとしている。

そして、個人化論は中期的、長期的な展望を欠いているという。1950年代を出発点とすれば、個人化のトレンドは見過ごせない。しかし、アメリカの発展から見ると50年代に見られる

均一性こそ普通ではなく、むしろ1930年代の状況の方が現代に近いのではないかという。

更なる問題は個人化論と標準化、制度化の関係についてである。ベック達の理論設定ではこの二つの矛盾する側面の関係が明らかとはいえない。古い構造が解体し、人々が自分でバイオグラフィーの枠組みや成り行きを作り上げていかなければならないとするなら、どこに、標準化、制度化、バイオグラフィーの社会的構造化といった観点の必要とされる余地があるのかということである。（Burkart1993b: 189）

最終的に個人化論の評価としてブルカルトは、ベックのテーゼは多くの重要な問いや、一連の注目すべき洞察をもたらしているが、「嫌われる概念」⁶⁾として、議論の精密化のためには役立つより、害になっている。それよりも個人化論では検討されていない、機能的分化や、価値や規範の変化のより詳細な説明というような理論的道筋へ再びつなげていくことが必要であるとしている。

これらの批判に対してベック／ベック＝ゲルンスハイムは直接反論しているが（BeckBeck-Gernsheim 1993）、個人化の概念に対する論点が多く、ブルカルトの再反論の中で「私の議論の中の決定的な論点を取り上げられていない」（Burkart 1993b: 190）、アメリカの例を挙げて議論しているのにドイツの例で反論していると揶揄されている。しかし、その後の研究の中で歴史的、地域的な論点を取り上げられているので、先ほどのような批判に対しどのような答えが出されているのか見ていくことにしよう。

2) 歴史的変化の中の個人化

個人化論が歴史的展望を欠いているという論点については、それほど当たっていない。個人化は産業化以降男性の個人化として始まり、20世紀の後半になって女性の個人化という形で進展している。しかし、ブルカルトが言うように現代に見られる一般的な傾向が既に以前に存在していたとすると、個人化のプロセスは歴史的な発展ではないことになってしまう。この論点についてはベック＝ゲルンスハイム（Beck-Gernsheim 1998）が整理しているので次に見てみよう。

ベック＝ゲルンスハイムは家族概念の再検討の中で、何世紀も以前に、統一した家族だけでなく様々な生活形態があったことを認めている。（Beck-Gernsheim 1998: 21）例えば19世紀の統計を見るといくつかの地域では婚外子の割合が現代よりも高いことがある。では、当時の慣習は現代よりもおおらかだったのか。しかし、「そのようなことを期待する人はがっかりするだろう」とベック＝ゲルンスハイムは言っている。（Beck-Gernsheim 1998: 24）当時の社会文化的な背景について書かれた歴史的研究によれば、当時も持続的で、社会的に承認された、秩序化された関係が重要であったのである。

当時、公的に婚姻を結ぶことの障害となったのは実は外的な事象、例えば農民の相続規則や財産を持たない者の結婚禁止であった。ここで言えることは、結婚が家の財産と結びついていたことで、家族の権利をめぐる戦いは、結婚をめぐる戦い、結婚のための戦いとなり、すべて

の所有階級と身分の人々にとって正当なつながりを保証する規則のための戦いとなっていたということである。

それに対し、現代では外的な結婚の障害は排除されている。それでも、多くの人たちは結婚せずに一緒に暮らしているし、少なからぬ人が子どもができた後も結婚しないている。すなわち、彼らは外的な事情の強制ではなく自分の意志で、自分たちの決定をしている。「彼らはもはや自分たちの関係を役所の判で正当化しようとは思っていない」のである。(Beck-Gernsheim 1998: 25) たとえ過去に似たような現象があったとしても、ここに大きな違いがあるということになる。現在と過去の結婚のあり方は違うのに同じ結婚という言葉でくくることは無理がある。ブルカルトの批判は一見するともっともだが、概念の歴史的背景を無視してしまったため、現実には存在している変化を見過ごすことになってしまっている。

ベック＝ゲルンスハイムは、過去には例外があったとしても、はっきりとした規則が存在していたが、今日では何が例外か、何が規則かわかりにくくなっていることを強調している。

また、黒人の問題についても触れているところがあるので見てみよう。まずベック＝ゲルンスハイムは黒人差別の問題に言及している。アメリカでは黒人と白人の間の結婚は拒絶されてきたし、ほとんどの州で禁止されてきた。しかし、歴史の進行の中で黒人と白人の間に関係が生じ、その中で子ども達が生み出されてきた。ただ、黒人と白人の性的な関係の一般的な形はほとんど権力的な上下関係に制約されたものであった。(Beck-Gernsheim 1998: 134,135)

このような厳しい制約下では、以前から黒人の中に個人化と似たような傾向があったとしても、個人化論が意図している意味での生活の多様性ということではない。このような制約が今でも続くのなら、ブルカルトが言うように、個人化はアメリカでは成り立たないことになる。

ベック＝ゲルンスハイムはさらに議論を進めている。しかし、今度は黒人とは誰かという問題が関わって来る。(Beck-Gernsheim 1998: 137)

アメリカでは、黒人と白人との間に差別がある以上このような黒人と白人の間に生まれてきた子ども達をどう扱うべきかというのは重要な問題である。そこで日常的には、よく知られているように、黒人の血が一滴でも混じっていれば黒人だという非常に単純な規則が用いられていた。どんなに遠い祖先であっても黒人がいる人は「白人のみ」の場所には入れないことになっていた。

ベック＝ゲルンスハイムは、この規則が単純であるためかえって問題があったことを指摘している。

黒人と白人の結婚が禁止されていた時代には、誰が黒人かを公的に規定するためにこの黒人の血が一滴でも混じっていれば黒人だという規則がいくつかの州で使われていた。しかし、実際には黒人の先祖が一人もいないことを証明することは難しいので、オレゴン州では祖父母の代まで、ルイジアナ州やノースキャロライナ州ではさらに二代さかのぼって調査が行われたという。当然のことだが規則の実際の運用は難しく、結果は恣意的で偶然が左右することになってしまった。(Beck-Gernsheim 1998: 137)

他方黒人の血が混じっている人の方もすべての人が黒人に見える訳ではない。中には白人に見える者もいた。彼らの中には新しい環境の中で白人として生きるために自分の生まれた環境から離れる人たちもいた⁷⁾。

しかし、時代が変わり、目に見える形での人種差別が廃止され、黒人の自己意識が高まって来ると、このような形での特権を得るための白人への移り変わりはまれな出来事になっていく。そうすると今度は逆に、白人から黒人への転向者のことが囁かれるようになってくる。黒人の血が一滴でも入っていれば黒人であるという規則を逆手にとれば白人に見えても自分は黒人だと主張することもできる訳である。

結局、「人種の帰属という社会的な秩序の問題を解決しようとする試みは、間違いや混乱、かくれんぼや疑いとといった迷路の中へと入り込んで行く」。(Beck-Gernsheim 1998: 140) 社会的な帰属は人生のチャンスや特権を決めるものであり、社会的に拒絶されたカテゴリーに分類されることは、誰も望まないまいだろう。だがここでベック＝ゲルンスハイムが強調するのは、良いカテゴリー、悪いカテゴリーすら、社会の中での雰囲気や政治的な風向きに影響されるので、社会的な構成物なのだということである。奴隷制の時代には黒い肌の色は容赦のない搾取や服従を意味していたのに、新しい法制度と自己意識の高まりの中で今度は有利になる場合が出て来るのである。こうなると個人が、先祖が黒人であることを沈黙するのか、それとも強調するのは個人的な愛情や神経の問題ではなく、政治状況や少数派が援助されるか差別されるかという問題でしかない場合が出てくる。

ベック＝ゲルンスハイムは以上のような黒人の問題を、現代社会の中でエスニシティへの帰属を決定する際の難しさを問題にする中で出しているのだが、これまでの叙述は個人化という観点からもとらえることができるだろう。

以前は黒人かどうかは国や法律が決めることであったのに対し、現代では個人の決断が大きな要因となりうる。もちろんすべての黒人に自分で帰属を決定できるチャンスがある訳ではない。しかし、人種のような一見すると変えることができないようなものまで個人の判断で左右されうるということは現代社会の特徴を考えるとときに重要である。伝統的な紐帯から解き放たれた人間は様々なことを自分で選択をするようになる。だがここで気をつけなければならないことは、人々が全く制約のないところで選択をする訳ではないということである。上記の例でもわかるようにそこでは伝統とは別の制約が働いている。黒人であることが有利かどうか決めるのは結局のところ制度である。個人が決断できるのは一つには決断を可能とする制度の助けがあるからである。ブルカルトは個人化と制度化は結びつくのかという疑問を出したが、個人化と制度化は相反するものではないといえるだろう。

最後にもう一つ触れておかなければならないことは黒人という概念の中身である。ブルカルトは黒人に独特の社会文化的背景があることを前提として議論しているが、ベック＝ゲルンスハイムの議論を見ると黒人とは何か、きちんと考え直さなければいけないのだということが分かる。この概念の見直しというのはベックにも共通する立場で、現実と概念のずれは常に問題

にされている。

このことはブルカルトの最後の論点でもあるこれまでの社会学理論と個人化論の関係を見る中でも明らかになるだろう。

3 個人化論の理論的批判

次に考えてみたいのは個人化論が今までの社会学理論とどういう関係にあるのかということである。先ほどのブルカルトの批判にもあるように、個人化論を使わなくても今までの社会的な概念で十分ではないかという立場もある。確かに個人化論の提起する問題を別の視点から見えていくことも可能だからである。その中で個人化論と特に共通する部分が多いのはシステム論的な社会分化論であろう。社会分化論も同じように社会が歴史的発展の中で分化をすると考えている⁸⁾。そこで今度はまず、ベック達がとらえようとした同じ社会的変化を社会分化論の立場から再構成することで個人化論を批判する、トマス・マイヤーの理論的モデル(Meyer 1993)を検討し、次に個人化論の側からの反論と対比することで、個人化理論の含意を明らかにしていきたい。

1) トマス・マイヤーの社会分化論

マイヤーは家族の変化を題材にしてシステム論的な社会分化論による理論化の優位性を示そうとしている。家族のシステム論的分析というと奇異な感覚を持たれる場合もあるが、マイヤーが依拠しているニクラス・ルーマンは、家族は社会的システムとして形成されると言っている。また、ルーマンは、「家族は社会構造と、とりわけ社会システムの分化の形態と共に変化する」(Luhmann 2005: 196,197)とも考えている。ではマイヤーが家族の変化を社会分化論とどうつなげているのか見ていこう。

まず、マイヤーも家族をめぐる最近の変化を否定できないものととらえている。しかし、多くの研究があるにもかかわらず、家族あるいはプライベートな生活形態の変化を簡潔に理論的にまとめているものはないという。(Meyer 1993: 23) 彼は個人化論を近代化研究の変種であるとし、成功はしていないとしている。というのは、家族やプライベートな共同生活の脱構造化のプロセスは確かに正しく強調しているが、新たに現れている構造の形成や編成を理解できず、その新たに生じてくる姿に十分な答えを与えることができないからだ、と言っている。その点で現実のプライベート性の動きを分析するには、システム論の理論構成が指導的パラダイムとして適しているとしている。

マイヤーの言うところの分化の理論はオーソドックスな社会分化論の範型に従っている。第一に、分化は社会進化の特徴であり、第二に、機能的特化とシステム形成は環境への適応能力の上昇を可能にし、その結果、内的構造の複雑化から新たな分化へという道筋を考えている。マイヤーによると家族の変化は、ダイナミックで複雑になった社会への反応であり、その結果、

家族という部分システム内部での更なる分化と説明される。（Meyer 1993: 25）すなわち家族という部分システム内部にさらに内部分化が進んでいると考えるべきだということである。

以上のような理論を現実には当てはめてみると、次のようになる。家族の変化は1960年代にはまだはっきりとした形で現れている訳ではなく、家族は部分システムとしてプライベート領域を担当していた。しかしその後の変化で家族という部分システムのプライベートな共同生活への独占的権限は弱まり、家族の範型は解体され、その結果、プライベートの形は複雑になって行った。それを社会分化論的に言うと、制度的な家族という共同生活の構造範型は意味を失い、親密性のための部分システム、あるいはプライベートな生活形態という機能システムが生じて来たということである。

マイヤーはシステムとしての家族の分化により、今までのノーマルな家族に加えて、二つの新しいタイプのプライベート性のシステムが区別できるようになるとしている。これらの三つのうち、第一のものはこれまでの家族に対応する、子供のいるプライベートの類型で、特別な教育的な行為に関することが特徴的であり、第二のリプロダクティブでないプライベートの類型は同棲のような非結婚的生活共同体（以下NELGと略す）や子供のいない結婚などで、特別なパートナー的な行為に関することが、第三のプライベート類型はシングルやルームシェアリングなどの生活形態で、個人的な行為に関することが特徴的となっている。（Meyer 1993: 27）⁹⁾

では、以下でマイヤーの類型がどのようなものかもっと検討してみよう。

（1）子供志向のプライベート類型

第一の類型として、子供を中心とした家族システムとしての小家族があげられる。その明らかな機能は子供の教育にある。ここでは夫婦よりも親子間のシステムへと重要性が向けられている。第二類型のNELGは愛に特化された社会システムであるのに対し、結婚と家族は子供の社会化のための制度へとようになってきている。

（2）パートナー関係を志向するプライベートの類型

子供中心の生活にたいして、NELGが増加していることはプライベートのシステムに大きな変化が生じていることを意味している。NELGと制度としての結婚は共同の家計と社会的に正当化された親密さや性関係という伝統的な場所で一致する。ここで問題となっているのは結婚や家族の廃棄ではなく、異なった二つの生活形態の分化ということである。NELGは機能的には愛の関係に特化したパートナー関係のシステムと理解できよう。従って、このパートナーシステムは関係それ自身が、構造を特徴づけ、構成するという点での意味となる。

（3）個人的プライベートタイプ

個人的なプライベートのタイプとは、慣習的な関係性やプライベートの概念から離れた生活形態である。マイヤーによればここではシングルや、ルームシェアリングのような同居共同体が意図されている。ここで親密関係は個人的な自己実現とより高度に調和する方向へと向けられている。

独身者といってもここで問題となるのは「自分の意志ではない独身者」ではなく「自分の意

志」による独身者のことである。シングルと同様、住居共同体の生活形態も特殊個人主義志向的なプライベート形態と把握できる。

マイヤーは、このような家族システムの内的分化を環境への適応の問題だと考えている。システムは内的分化によって環境への適応能力を高めることができると考えるからである。従って、機能的に異なるアクセントを持ったプライベートの種類の分化は、「現代の高度に複雑な社会的結合の条件に適合し、それと両立できるような構造や機能の変化」(Meyer 1993: 34) なのである。プライベートのシステムの内部分化は複雑な環境に対応したもので、それは、ダイナミックな現代社会に適応するためプライベートのシステムの柔軟性を高めてくれる。この点からマイヤーはベック達を批判する。ベック達は労働市場と家族の矛盾を深刻に考えているが、プライベートの構造の分化により複雑化する労働市場の要求に機能的にうまく対応できる。だからこそ過去何十年かの間にプライベート構造の分化が急激に進んだのだ、ということである。この適応の例としてマイヤーが挙げているのが時間である。マイヤーによれば、職業、教育、行政などの領域では直線的なシステム時間が使われているが、家族の時間の利用はどちらかというと循環的ではばばらである。その為時間を同期化する圧力が強まる。このような同期化の要求に適応するためにプライベートの側で分化の力が働いたのである¹⁰⁾。

2) 個人化論との比較

マイヤーのモデルは一見するとすっきりとしたわかりやすいものである。ベック達はこのようなモデルに対しどこに違いを見るのだろうか。ベック達がマイヤーの主張に対し直接答えてはいないので、ここでもベック達の考えを対置させる形で検討して行こう。

まず個人化の歴史的発展のプロセスを検討してみよう。

ベック＝ゲルンスハイムによると個人化は次のような段階で発展してきている。(Beck-Gernsheim 1994: 121-23)

まず、産業化と共に家族は労働共同体、経済共同体としての機能を失い、労働市場と家族の新しい関係が始まる。始めの段階で家族外での収入労働に関係したのはもっぱら男性であった。それに対し女性はまず家、家事、子どもという、新たに形成されたプライベートの領域を割り当てられた。この男女の関係の枠組みの中で新しい形の相互依存性が展開された¹¹⁾。産業以前の家族の特徴だった連帯への強制は和らげられた形で存続していた。

次に、家族と個人化の新しい段階は社会国家が発展を始め、徐々に形作られていった、19世紀の終わり頃から、とりわけ20世紀の後半から始まる。市場の厳しさを和らげるため、段階的に非常に様々な保険制度が導入される。より多くの社会的公正を貫くため、社会的に弱い集団に物質的支援が導入された。集団的な支援制度が始まると、最低生活費が家族と別のところから保証される。全体として個々の生活設計の論理が促進され、家族へのつながりは弱められる。

さらに、19世紀末に始まり、1960年代から加速化した女性のノーマルなバイオフィーの変化が新たな区切りをもたらした。教育、職業、家族のサイクル、法制度等の変化を通じより

多くの女性達が家族の結合から少なくとも部分的には解き放たれた。その結果、家族の力、とりわけ男性の力は弱まり、女性は経済的な存在保証や、社会的ステータスのために、結婚を必要としなくなった。女性のノーマルなバイオグラフィーの中にも個人的な生活設計の論理が徐々に貫徹して、連帯への強制はさらに壊されていった。

以上がベック＝ゲルンスハイムによる個人化の発展の記述だが、先ほどのマイヤーの説と比べてみると抽象的な発展ではなくあくまで個人の側からの視点であることに注意が必要だろう。マイヤーの理論化はすっきりとしてはいるが、個人のレベルで何が起こったのかは説明しない。他方、ベック達は元々社会がどう変わるかではなく、人々がどう変わっていったかを問題にしているのではないか。従って、マイヤーの批判は視点の違いを無視しているのでそれほど意味は無いことになる。個人化論はシステム論とは違う問題を見ている。

この点はベック達の家族に関する問題設定を見るとより明らかになる。

ベック＝ゲルンスハイムは次のような問題を提出している。(Beck-Gernsheim 1994: 119)ほとんどの男性や女性が親になることを人生の目標としていることが調査によりよく知られているのに、何故若い世代では以前の人よりもしばしばこの目標を実現できないのか。どこに壁があり、どこに抵抗があるのかと。また、ほとんどの単身者が原則的にパートナーがいることを拒否していない。では何故彼らは実際には一人で生きているのか。何が障害あるいは競合する目標なのかと。

これはマイヤーの提出した類型と直接関係する問いである。マイヤーならば以上の問いに複雑化する社会への適応と答えるのだろうか、しかしそれでは漠然とし過ぎであろう。また、マイヤーの類型では「自分の意志ではない独身者」、結婚したくてもできない人は落とされてしまっている。

時間の問題についても、ベック＝ゲルンスハイムはマイヤーとは違う記述をしている。

ベック＝ゲルンスハイムによると、家族の構成員の日常は共通の場所で生じるのではなく、全く違った地点に分布している。もはや共通の時間的リズムはない。その代わりに、構造的に家族の日常に介入してくる、様々な社会的制度の制約がある。幼稚園、学校、子ども組織の時間規則、妻と夫の職業的な就業時間、店の開店時間、公共交通機関の時刻表。とりわけ職業的労働時間のフレキシブル化は家族の日常に介入し、共同生活の要求とは一致しない、よく変わる、不規則な形で、時間的制約を設定する。それで、しばしば不調和が生じ、その結果、調整やバランス取りが必要になる。「身体的、心理的な浪費をしながら、時には助けてくれる人たちのネットワークを駆使して、このような成果をもたらすのはだいたい女性である」とベック＝ゲルンスハイムは強調している。(Beck-Gernsheim 1994:124,125)これが同期化の圧力への適応の別の側面である。

こうしてシステム論的な社会分化論と個人化論を比較してみると似ているようだが、両者の求めるところが違うことがよくわかるだろう。社会分化論は社会全体の動きを、個人化論は人々の動きを視野の中心におさめている。こうして見るとベック達が個人化理論にこだわる理

由がわかってくる。このような人々の動きは多分、今までの言葉では語れないということではないか。そこで、この点については次に改めて検討しよう。

4 個人化論の視点

最後にベックやベック＝ゲルンスハイムが何故、今までの社会学的理論でなく、個人化論を主張するのか、個人化論の根本にある視点について考えてみたい。

社会学には、二つの対立する視点があることはよく知られている。一つは個人の側から社会的なものを見る立場で、もう一つは全体の側から見る立場で、それぞれ行為者と社会構造から分析する。ベック／ベック＝ゲルンスハイムはこの二つの考え方がそれぞれ不完全であるし、相互補完的なことは認めている。しかし、全体への視点が個人への視点を押さえつけてきたということが示されるべきである、としている。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 27)

一般的には、このような個人の視点と全体の視点を融合する試みはなされている。だが、ベック／ベック＝ゲルンスハイムはこの二つの視点は当分の間融合できないのではないかと考えている。

ベック／ベック＝ゲルンスハイムここで面白い考えを出している。個人的視点とシステムの視点の対立は、歴史的な発展として見ることはできないのではないかとこのだ。伝統的社会、前産業的社会なら両方の視点のある種の対応関係から出発できたかもしれない。しかし、この予定調和的なハーモニーはモデルネの発展の中で壊れたのだ。もちろんこの問題は既にデュルケムやジンメル社会学のテーマであった。だが、ベック／ベック＝ゲルンスハイムによると、二人とも個人化した社会の超越的な価値統合の可能性を想定している。しかし、この理念は、個人が集団や統合の古典的な形(家族や階級)から解放されるにつれ、より非現実的となっていってしまう

ベック／ベック＝ゲルンスハイムは例として、評論家ハンス＝マグヌス・エンツェンベルガーの「平均的な日常のエキゾティック」という事例を紹介している。エンツェンベルガーは我々の生活の中にどれほどエキゾティックな要素が日常的には入り込んでいるかということを紹介している。

そのような状況にあるのに今でも、制度は個人の古くなった像、その社会的状況や状態を基礎にしている。ベック／ベック＝ゲルンスハイムは皮肉を込めて言っている。「古くなった概念のステレオタイプで研究している社会学者に支えられて、制度の管理者は自分の権力を危険にさらさないため、是が非でもそれにしがみついている」。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 29)だが、その帰結は、政治階級が「外側の」個人を馬鹿で厚かましいと見なしていることだという。当然のことだが個人の側も彼らを同じように見ている。

以上のような社会的背景から、個人化論が求めることは次のようなことになる。第一に個人と古くなってしまった社会的形成物との紛争という問題を、個人の視点から分析することを可

能にする関係枠組みを作り出すこと。第二に現代社会の発展の中で、伝統的な意味や行為の単位の仮定が疑わしくなっていることをはっきり示すことである。その結果、ベック／ベック＝ゲルンスハイムによると、個人の行為や思考から独立した、社会的なものの存在や再生産を仮定するシステム理論はリアリティの内容を失うことになる。現在、すべての行為領域で「社会的なもの」の内容、目標、構造について新しく協議し、見つけ出し、形作るという、社会的、政治的緊急性があるにもかかわらず、そのような緊急性に目を向けないなら、システム理論は、システム形而上学となってしまう¹²⁾。

以上のような議論の中から、ベック／ベック＝ゲルンスハイムの基本的な問題設定はかなりはっきりとして来ただろう¹³⁾。制度保持の観点に個人の観点を対置する社会学を作り出すことである。

政治や行政の行為者や彼らを補助する学者の側からすると個人は、阻害要因、計算できないもの、いらだちの源泉になる。彼らはすべての計算をひっくり返してしまうからである。彼らからすれば個人は非合理的なものである。

しかし、個人の側は官僚化された政治学や社会科学のとなえる標準化の必要性に耳を傾けない¹⁴⁾。ベック／ベック＝ゲルンスハイムが言うような、新しい人生設計、組み立てバイオグラフィ、綱渡りバイオグラフィの洪水は、規範化や道徳化では対抗できないのである。以前は例外と無視していい阻害要因であったものがますます拒否できなくなり、それどころか基本状況となり、その結果、現在、政治や制度の中で支配的な社会像と生活できる形を求めて戦う個人の生活状況の間に割れ目がはっきりと現れているのである。

だから、このような緊張の場で「社会学はその概念形成や調査のルーティンを考え直さないといけない」(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 32)のである。古い分類や図式は制度的な行為者には重要であるかも知れないが、分析的には意味の薄いものになってしまっている¹⁵⁾。

ここで引き出された結論は前節で導きだされた結果と一致するものがあるだろう。個人化論は個人の視点から社会を見直して行くものである。従って、個人化論はこの意味でベックの再帰的なモデル論と結びつく。ベックは現在生じている社会の大きな変化を再帰的なモデル論という枠組みで分析しているが、個人化論はその中で個人の視点から社会を再構想して行こうとするものである。ただ、そこでは課題が二重になっていることに注意をしなければならないだろう。個人化論は第一段階として個人化が進む現実を分析する理論である、しかし、第二段階として現実の個人を見ることで社会の新しい形を構想しようとするものである。現在のところ第一の課題に関してはかなり成功していると思われる。個人化論の登場で今までとは違った視点がもたらされたからである。しかし、第二の課題はどうだろうか。こちらの面ではまだやるが残されているようである。ただ、ベックは「構造はもはや単に再生産されるだけでなく、発明され、討議され、決定され、正当化される」(Beck 1994: 472)と言っている。社会の新しい形を構想することは我々の課題でもある。

注

- ¹⁾ ベックとベック＝ゲルンスハイムはそれぞれ補完的に個人化について議論しているの、以下では、それぞれの著作および共著の中からポイントとなる論点を抽出して行く。
- ²⁾ 組み立て式バイオグラフィーとも言っている。(Beck/Beck-Gernsheim 1990: 13)など
- ³⁾ ベック／ベック＝ゲルンスハイムは制度化された個人化ともよんでいる。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 21)
- ⁴⁾ 女性の時間のやり繰りの問題は次に触れる。
- ⁵⁾ ベックは、このような条件の下で生きて行くことは、システムの矛盾のバイオグラフィー的な解決であるとも言っている。(Beck 1986: 219)
- ⁶⁾ ベック自身が使った言葉。(Beck 1986: 205)
- ⁷⁾ 補足すると、19世紀末に至るまで黒人の九割以上は南部という限られた地域に住んでほとんどが農業生産に従事していた。九割の壁を破ったのは1900年の国勢調査がはじめてであるという。(本田1964,170) その後も南部の農村からの黒人の流出は続き、1960年頃には約四割が南部以外の地域に住むようになり、ほとんどすべてが都市の住民となった。そして同じ時期に南部においても都市人口が農村人口を上回るようになった。黒人の都市への移住は大都市を中心に行われほとんどの黒人は労働者になり、黒人の都市化はそのまま黒人のプロレタリア化へとつながっていく。こうした歴史的発展を見るとブルカルトが言うような黒人の社会文化的な特殊な環境がずっと続いて黒人独特の文化が形成されていた、とは考えにくいのではないかと、むしろ移動により伝統的な束縛から早くに解放されたことで個人化を先取りしていると考えの方が自然に思われる。
- ⁸⁾ 例えばベックは将来の家族について、「パリエーション豊富な家族的な、および家族外での共同生活の形態が平行して生じ、存続していく」と言っている。(Beck 1986: 195)
- ⁹⁾ ルーマンは家族の分化に関して、夫婦というサブシステムの分化は比較的良く見られると考えているが、それ以外のサブシステムの形成は特殊なもので、家族にとっては問題だ、と言っている。(Luhmann 2005: 203)
- ¹⁰⁾ ルーマンは、以前は女性が家庭にいて、男性がその結果仕事の必要に応じて時間を使えたので、家庭と職業の義務を時間的に同期化させるという複雑な問題は回避された、と言っている。(Luhmann 2005: 200)
- ¹¹⁾ ベック／ベック＝ゲルンスハイムは男性のみの解放なのでこの時期を「半分のモデルネ」とよんでいる。(Beck-Gernsheim 1994: 121)など。また、ベックは、マックス・ウェーバーの階層論にある身分と階級の規定はこの段階に特に当てはまっていると考えている。(Beck 1994: 49-50)
- ¹²⁾ ベックはルーマンのシステム理論を人間を必要としない完璧な城に例えている。(Beck 1988: 167) またそこで展開されるルーマン批判を参照。
- ¹³⁾ ベック／ベック＝ゲルンスハイムは、すべての社会学は個別的なもの、個人の否定という「生まれながらのバイアス」を基本に持っていると言っている。(Beck/Beck-Gernsheim 1994: 30)
- ¹⁴⁾ ベックは「産業社会はその労働や生活の図式において現代の社会である」という考えを伝説として否定している。(Beck 1986: 251)
- ¹⁵⁾ ベック＝ゲルンスハイムによると、多くの慣れ親しんだ概念がもはや当てはまらず、時代遅れになったように、またどこか疑わしく感じられ、若い世代の生活感や生活の現実をもはや映すことができなくなっているという。(Beck-Gernsheim 1998: 10)

引用文献

- Beck, U., 1986, Risikogesellschaft. Auf dem Weg in eine andere Moderne, Frankfurt a. M.: Suhrkamp
- Beck, U., 1988, Gegengifte. Die organisierte Unverantwortlichkeit, Frankfurt a.M.: Suhrkamp
- Beck, U. und Beck-Gernsheim, E., 1990, Das ganz normale Chaos der Liebe, Frankfurt a.M.: Suhrkamp
- Beck, U. und Beck-Gernsheim, E., 1993, "Nicht Autonomie, sondern Bastelbiographie, " Zeitschrift für Soziologie, 22 :178-87
- Beck,U. und Beck-Gernsheim, E. Hg., 1994, Riskante Freiheit, Frankfurt a.M.: Suhrkamp
- Beck-Gernsheim, E., 1998, Was kommt nach der Familie? Einblicke in neue Lebensformen, München : Beck
- Burkart, G., 1993a, "Individualisierung und Elternschaft, " Zeitschrift für Soziologie, 22 : 159-177
- Burkart, G., 1993b, "Eine Gesellschaft von nicht-autonomen biographischen Bastlerinnen und Bastler? -Antwort auf Beck/Beck-Gernsheim," Zeitschrift für Soziologie, 22 : 188-191
- 本田創造, 1964, 『アメリカ黒人の歴史』 岩波書店
- Luhmann, N., 2005, Soziologische Aufklärung 5, 3.Aufl., Wiesbaden : Vs Verlag für Sozialwissenschaften
- Meyer,T., 1993, "Der Monopolverlust der Familie. Vom Teilsystem Familie zum Teilsystem privater Lebensformen," Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 45 : 23-40

参考文献

- Beck, U., 1983, "Jenseits von Stand und Klasse? : Soziale Ungleichheiten, gesellschaftliche Individualisierungsprozesse und die Entstehung neuer sozialer Formationen und Identität," Soziale Welt Sonderheft 2 : 35-74
- Beck-Gernsheim, E., 1983, "'vom 'Dasein für andere' zum Anspruch auf ein Stück 'eigenes Leben' : Individualisierungsprozesse im weiblichen Lebenszusammenhang," Soziale Welt, 34 : 307-40
- Brock,D., 1991, "Die Risikogesellschaft und das Risiko soziologischer Zuspitzung," Zeitschrift für Soziologie, 20 : 12-24
- Ishida, M., Ito,M., Suzuki,M., Nihei,N. and Maruyama, M., 2010, "The Individualization of Relationships in Japan," Soziale Welt, 61 : 217-235
- 伊藤美登里, 2008, 「U. ベックの個人化論」『社会学評論』 59 : 316-330
- 三上剛士, 2007, 「『社会的なもの』の純化か終焉か?」『社会学評論』 57 : 687-706
- (2011.10.5 受稿, 2011.11.2 受理)